

近世東北農村における家族形成のパターンと要因

Patterns and Covariates of Family Building in Preindustrial Northeastern Japanese Villages

津谷典子（慶應義塾大学）・黒須里美（麗澤大学）・石井 太（慶應義塾大学）

Noriko Tsuya (Keio University), Satomi Kurosu (Reitaku University), Futoshi Ishii (Keio University)

Email: tsuya@keio.jp

本報告は、18～19世紀の奥州二本松藩の2村（下守屋村と仁井田村）の人別改帳から得られるマイクロデータとイベントヒストリー分析モデルを用いて、近世東北農村の女性の家族形成のパターンと要因を分析することを目的とする。本分析が対象とするのは、10～49歳の人口再生産期にあり、初婚を経験したと特定・推定できる女性の parity progression（初婚から第1子出生、第1子出生から第2子出生、第2子出生から第3子出生、第3子出生から第4子出生への progression）の確率とタイミング、およびその要因である。

二本松藩は現在の福島県中央部に位置し、2村はほぼ全員が家族農業に携わる純然たる農村であった。現存する人別改帳は、下守屋村では1716～1869年（うち欠年9カ年）、仁井田村では1720～1870年（うち欠年5カ年）であり、18～19世紀の約150年間をほぼ網羅する人口史料が存在する。両村の人別改帳は現住地ベースで毎年記録され、欠年や理由不明の記録消失が僅少であることから、非常に高質な人口史料であると言える。さらに、この人別改帳には殆ど漏れなく出生と死亡の発生日が記録されていることも貴重である。これにより、各出生間の長さを月単位で算出することができ、全近代アジアの歴史人口における parity progression についての精緻な分析が可能となる。一方、人別改帳には（他の近代以前アジアの人口史料と同様に）、出生後最初のお調べまでに死亡した乳児は原則記録されないことから、本分析が対象とするイベントは全ての出生ではなく、あくまで「記録された出生（recorded births）」であることには留意が必要である。

本分析で用いる分析モデルは比例ハザードモデル（Cox proportional hazard model）であり、被説明変数は女性の初婚とその後の出生の間隔の月数と、parity progression の各セグメントにおいて outcome イベントを経験したか否かである。そして、説明変数・コントロール変数として多変量解析モデルに導入するのは、（各 parity progression セグメントの期首年における）女性の年齢、女性の初婚年齢、（各セグメントの起点となる）出生児の性別、（各セグメントの期首年の）世帯の持高、女性の世帯関係、そして時期と居住する村である。さらに、第2子以降の出生への progression の分析では、当該セグメント以前に記録され生存している子の数と性別も説明変数に加える。

本報告では、まず家族形成プロセスを構成する parity progression の各セグメントの平均間隔と期首における女性の年齢、時間の経過による次の parity への progression の確率などについて形式人口学的分析を行う。次に、上記の比例ハザード分析を行い、近世東北農村における「記録された出生」の人口学的、社会経済的、家族・世帯的要因を多変量解析する。さらに、人別改帳情報のある全期間（1716～1870年）を対象とした分析に加えて、18世紀と19世紀に分けて分析することにより、近世東北農村における家族形成行動のパターンと要因の変化を探る。